

台湾新文学运动研究

(1920—1926)

——中日比较文化视野下（日文版）

刘海燕／著



知识产权出版社
全国百佳图书出版单位

台湾新文学运动研究

(1920—1926)

——中日比较文化视野下（日文版）

刘海燕／著



知识产权出版社
全国百佳图书出版单位

图书在版编目(CIP)数据

台湾新文学运动研究: 1920—1926: 中日比较文化视野下/刘海燕著. —北京: 知识产权出版社, 2017.12

ISBN 978-7-5130-5328-0

I. ①台… II. ①刘… III. ①比较文学—文学研究—中国、日本 IV. ①I206②I313.06

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2017)第 307762 号

内容提要

台湾新文学运动是日据时期台湾近代民族运动的重要一环。本书以20世纪20年代初期的台湾新文学运动为研究对象,通过对这一时期的文体改革、白话文运动、新旧文学论争及短篇小说进行系统、有机的分析,论述了各个文学现象在台湾新文学生成期所担负的不同使命和意义。具体、详实地梳理出台湾新文学、特别是其草创期的发展脉络。作者将台湾知识青年的文学活动与同时期台湾的殖民统治、社会运动及民族意识相结合进行分析,此视角独具特色。本书通过对大量一手资料的详实论证与分析,探讨了殖民地青年试图通过文学活动,实现台湾反日脱殖回归祖国、打破陋习改造社会的近代化诉求。

责任编辑:冯 彤

责任校对:谷 洋

装帧设计:张 冀

责任出版:孙婷婷

台湾新文学运动研究(1920—1926)

——中日比较文化视野下

刘海燕 著

出版发行: 知识产权出版社有限责任公司 网 址: <http://www.ipph.cn>

社 址: 北京市海淀区气象路 50 号院 邮 编: 100081

责任编辑: 010-82000860 转 8386 责编邮箱: fengtong@cnipr.com

发行电话: 010-82000860 转 8101/8102 发行传真: 010-82000893/82005070/82000270

印 刷: 虎彩印艺股份有限公司

经 销: 各大网上书店、新华书店及相关专业书店

开 本: 787mm × 1092mm 1/16

印 张: 16

版 次: 2017 年 12 月第 1 版

印 次: 2017 年 12 月第 1 次印刷

字 数: 254 千字

定 价: 64.00 元

ISBN 978-7-5130-5328-0

出版权专有 侵权必究

如有印装质量问题,本社负责调换。

序 文

劉海燕さんの本著は、2013年1月に名古屋大学大学院国際言語文化研究科に提出された氏の博士学位論文に加筆修正を加えたものである。

劉さんの博士論文が扱った1920年代、厳密には1920年から1926年までの時期は、日本では大正時代(1912—1926)の後半に当たる。この時代は、戦後、「大正デモクラシー」という名で総括されるようになったことにも窺えるように、日本の近代化が政治的にも、社会・文化的にも、欧米の民主主義的、自由主義的傾向に呼応し、同期(シンクロ)しうるような段階に達し、この流れにのって知識人や芸術家たちがさまざまな活動を展開した時代でもあった。そして、彼らの活動の中心地たる東京は、日本の地方に住む若者たちのみならず、東アジア各地からの多くの留学生たちを惹きつけてやまない帝都として、限りない魅力を発揮していたのである。近代都市東京の^{オーラ}魅力、それは、明治政府が明治という時代の終わるそのぎりぎり最後の時期に至って、幕末に西欧諸国の圧力によって結んだ不平等条約の改正(1911年)にこぎ着け、国際舞台において西欧各国と肩を並べる政治的な地位を獲得した、その一つの、そして見逃すことのできない成果だった。東京は明治期のように、官僚や役人、政治家たちの集まる首都、将来そのいずれかを目ざして勉学に励む書生たちの首都としてではなく、今や西欧世界と共振する知識と芸術・文化の中心地として、その面差しを大きく豊かに変貌させつつあった。

夏目漱石はまさしくこの条約改正の時期、明治末期に行った講演『現代日本の開化』(1911年8月)で、日本の開化(近代化)を「外発的」な強

いられた開化と評し、西洋の内発的な開化の「圧迫によって吾人はやむをえず不自然な発展を余儀なくされるのであるから、今の日本の開化は地道にのそりのそりと歩くのでなくって、やッと気合を懸けてはびよいびよいと飛んで行く」ほかないのだと、いささか自嘲気味に語っている。漱石のこの言葉は、明治という時代を生きてきた知識人の、その終着点における真率な感慨と過たぬ現実認識を表現しており、その「外発」性が生み出した歪みは日本の近代化の未熟さとして、やがては「不自然な発展」の帰結、つまり破綻に行き着くことになった。とはいえ、その道のりは決して一直線で不可避のものだったわけではない。この講演から十年も経たないうちに、漱石とは世代の異なる「新しい」時代の知識人や芸術家たちが、西欧世界との同調・共振を自身の現実として実感し共感しつつ、そこに参加するためのさまざまな運動を開始するからである。そのような運動を促し、そこにエネルギーを注ぎ込む「近代」という名の時代精神が、たとえどんなに脆弱なものであったとしても、当時の東京という時空には溢れていたように思われる。だからまた、この時代精神は、即時に汎東アジア的に伝播し、大きな影響を与えたのである。

劉海燕さんの本著をこれから読み進める読者のために、その内容の紹介もかねて、彼女自身の論述においては背景に退いているが、それでも明らかにその論考の射程に捉えられていたはずのもの、いわばその四つの章で論じられている諸事象をつなぐ役割を果たしていた一つの時空表象を、かつての指導教員として、老婆心ながらここに明らかにしておきたい。それは、これらすべての事象に共通して関わる、1920年前後の東京という時空表象である。つまり、この序文の冒頭で、いささか唐突な印象を与えることを承知しながら、同時代の東京、西欧世界と同期する東京について略述したのは、まさしくそのためなのである。

本著の第一章は、1920年代始めの東京にあこがれて留学し、「近代」の空気を吸った植民地台湾の知識人と郷里で彼を待つ許嫁が直面する結婚問題、自由・恋愛結婚と因習的結婚の葛藤、「近代」的価値観と旧・儒教的価値観の葛藤をテーマとする謝春木の小説について論じている。続く第二章では、

東京の台湾人留学生、黄呈聡と黄朝琴が大陸からの留学生と出会い、強い刺激を受けて台湾で中国白話文の普及運動を始める経緯と、それが内包した大陸とは異なる困難を扱う。つまりこの二つの章は、いずれも東京での留学を契機に「近代」及び近代化に目覚める知識人青年が帰郷して直面する台湾の現実との葛藤、及び青年たち自身のこころの裡なる葛藤、そしてその克服への模索に焦点が当てられている。「近代」への同期を促す東京という時空の触媒作用が、新旧の葛藤を生むと同時に、「新」、つまり「近代」へ向けての葛藤の克服をあらかじめ方向づけているのである。

第三章では、台湾で最初の白話文小説が誕生する前夜の、実験的ともいえる初期小説群（劉さん自身の調査によって新たに見出された四点を含めて二十二点、そのほとんどが白話文である）を考察対象とし、その文体とテーマの相互関係に焦点を当てて分析している。ここでも彼女の調査によって判明した七名の作者の履歴は、そのほとんどが東京での留学体験を含み、そのテーマ設定と文体の選択において、東京の醸し出す「近代」の空気を吸っていたことを如実に示している。

そして最終章の第四章は、厦門での旧文人詩社への参加を通じてまず旧文学に目覚め、さらに北京での恋愛体験を通じて、帰台後に白話文を実践・鼓吹する近代文学者へと大きな転身を遂げた張我軍の文学活動と彼が引き起こした「新旧文学論争」の軌跡を辿る。厦門→北京→台北という都市間の移動は、一見すると東京との関連をまったく示していないが、北京における張の白話文体習得に大きな刺激を与え、白話文による創作を促した恋愛体験は、張自身が後に明かしたように、同時代の中国で刊行されていた『婦女雑誌』に翻訳・紹介された東京発の恋愛論から強い影響を受けていた。1920年代前半の『婦女雑誌』はとりわけ東京発の恋愛・結婚に関する論議・論考及び女子教育に関する記事を数多く翻訳し掲載しており、厨川白村が1921年に東京朝日新聞に連載した「近代の恋愛観」、1922年に『婦人公論』に発表した「恋愛と自由」（共に1922年に東京の改造社から『近代の恋愛観』として刊行された）もまたすぐさまこの雑誌に紹介されたからである。張我軍が帰台後に『台湾民報』で展開した近代文学及び恋愛に関する諸論も、

彼自身が明言するように主に厨川の一連の著作を改めて熟読・研究した成果であり、張は北京を経由することによって台湾における厨川の、そして東京という時空が生んだ近代思想の熱烈かつ真摯な紹介者・鼓吹者となった。張はいわば、北京で東京に出会ったのである。

もちろん、英文学者厨川白村の主張する思想はそのほとんどが西欧近代思想の焼き直しであったことも今日ではよく知られている。しかし、東アジアの近代化が「外発的」かつ後発的な強い開化であったことを考えるならば、西欧近代にほぼ同期^{シンクロ}していた1920年代の東京で発信された近代思想が、すぐさま汎東アジア的なインパクトを持ちえた、つまり汎アジア的に同期しえたことは、改めて注目されてよい。

さて、かつての指導教員の老婆心はこのくらいにして、そろそろ本著の〈序〉に是非とも記すべき本題に立ち戻らなければならない。

劉海燕さんの本著のベースである博士学位論文は、公開の口述審査を経て、審査員の全員一致で合格と判定された。その審査結果の要旨のうち、評価すべき点についての記述の一部をここに紹介しておきたい。

「本論文は1920年代の植民地統治下の台湾において、新文学が成立する前夜の複雑な文学状況に焦点を当て、当時の知識人青年たちの文学活動を特徴づける、日本語文、文言文、白話文という言語・文体選択と、同時代の政治・社会状況、民族イデオロギーとの関わりを捉えようとした点に特色があり、これまで様々な観点から個別に論じられてきた諸問題を一つの視野に収めようとした試みは評価に値する。また、先行研究において見過ごされてきた細部に目を凝らし、地道な調査結果から、いくつかの発見と蓋然性の高い推論を行っている点も、論者の実証研究への真摯な姿勢を裏づけるものと言える。」

もちろん、博士論文というのは独立した研究者として歩み始めるその出発点を確立するためのものであるから、審査員からは当然ながら、今後に向けての発展を期待して、さまざまな指摘があった。その主なものとしては、1. 台湾近代化運動のイデオロギー的展開の捉え方、日本モデルから大陸モデルへという一義的解釈には、当時の日本と中国の台湾人留学生数から見

でも疑問がある、2. 本論文で注目した「白話文運動」、「初期小説」、「新旧文学論争」という三つの事象の背景をなす時代状況の把握が足らず、そのため本来は相互に関連しているはずのこれらの事象の記述が個々に分離している、3. 文言文、白話文、日本語文などの文体及び近代文体成立過程を研究するには、その文化的伝統と文脈を踏まえた比較分析が必要であるが、その基礎的知識がまだ不足しており、分析が表面的である、などが挙げられる。

かつての指導教員として、博士論文審査の主査として、劉海燕さんの論文に対するわたし自身の評価も、そのほとんどは上に紹介した内容に含まれている。しかし、あえてその一部を敷衍するならば、個々の現象が生じてくる時代状況全体を捉えようとする持続的な努力、すなわち、それらの諸現象の生じた社会的文脈を、共時的かつ通時的な系を腑分けした上で包括的に捉えようとする持続的な意思が、今後の研究の発展には欠かせないと考えている。そして、これまでの成果を踏まえ、その問題連関の全体的把握を可能にする新たな出発点として、長く劉さんの研究の焦点となってきた台湾知識人たちの白話文（近代文体）や近代小説成立の問題を、先に述べた1920年代の東京という時空との関りで捉え直すことは、有意義で生産的な作業ではないだろうか。つまり、大陸と台湾の間に東京を置き、その東京という時空が「近代」あるいは「近代化」において果たした汎東アジア的な意味を念頭に置きつつ、それとの関連でこれまでのテーマを追求していくということである。

日清戦争後の1900年頃から辛亥革命勃発に至る十余りの間、東京で学んでいた中国人留学生の数はその最多期には約一万人に上った。この時代の東京はまだ、漱石の言う「やッと気合を懸けてはぴょいぴょいと飛んで行く」猛スピードの近代化の余波を残していたが、東京にやってきた留学生たちはそれに数倍も輪をかけた猛スピードで自国の近代化に役立つと思われるものは何でも、日本人の著書であれ、欧米の翻訳書であれ、次々と中国語に翻訳していった。白話文の政治的有用性については革命派の人々が以前から注目していたが、それと呼応して1903年の東京では留学生たち

の演説講習会が開かれ、そのメンバーが雑誌『白話』を刊行して白話と演説の重要性を説いている。その中心となって活動したのはあの女性革命家として名高い秋瑾だった。そして民国成立後、すぐにまた政局不安定に陥った中から『新青年』の文学運動が盛んになる。白話文は今や近代小説と近代思想の文体として、若い知識人たちが先を競って自己表現を試みる媒体となり、「近代」的知性を象徴し代表する若い世代の文体となった。そして、この雑誌が中心メンバーの政治的主張の違いから 1922 年に停刊に至っても、白話文はその政治性と文学性を共に担いつつ中国の近代文体として定着していったのである。

これに対し、日本の近代文体成立のプロセスは、まず明治 5 年 (1872) の学制発布を機に初等教育の必要性という観点、つまり制度的啓蒙の観点からその試みが始まり、それが明治 20 年になって小説の近代化運動 (言文一致運動) へと発展する。とはいえ、旧文体小説の勢いはそう簡単には衰えず、また言文一致をめざす作家にとっても、旧文体の拘束力は当初は甚だ厄介なものであった。しかもそれと並んで、漢詩文を愛好する旧知識人も、こちらはしばしば東アジアにおける覇権という政治的野心とも絡んで、明治期には長く勢力を保ったのである。しかし、そのような文体をめぐる葛藤も、明治 30 年代後半に漱石が登場する頃になると、もはや克服された過去になっている。大正時代の東京の近代文体はヨーロッパの文学運動をすぐさま受容してそれを日本語で実験するような、一面軽薄とも見えるが、軽妙洒脱な柔軟さ、あるいは鋭敏で研ぎ澄まされた感性を示すようになっている。多様な小説のみならず、とりわけ近代詩の分野で、次々と新風を吹き込む作品が発表されていくのはまさしくこの時代であり、留学生たちが見た東京は、近代的恋愛を鼓吹する厨川白村の言説と並んで、このような文芸のための文芸が咲き乱れる時空でもあった。台湾人留学生たちも、1922 年に文学団体「創造社」を結成した郭沫若や郁達夫などの中国人留学生たちも、この同じ時代の東京という時空に生き、そこで日々創造されるさまざまな思想や文化・文学から大きな刺激を受け、多くのものを吸収していたのである。

ここに記した大正時代の東京についての素描が、劉海燕さんの今後の研究の発展に実際に役立つものかどうかは、わたしにも本当のところ分からない。それは、あくまで一つの可能性として、思いついたこと、かねて思っていたことを示唆したに過ぎないからである。研究というのは、実は非常に多くの可能性を持っている。だから、研究したい対象があり、研究するに足る史料・資料が存在する限り、それをどのような角度から、どのように発展させるか、その選択は劉さん自身に完全に任されていることも、あらかじめ言っておかなければならない。

ともあれ、月並みな言い方をすれば、「継続は力なり」である。そして、この月並みな「継続」をわたしは劉さんに期待したいのである。

劉海燕さんの現在については、2013年3月に博士学位を取得して帰国し、現職の湖北大学日本語科の教員となってから、大変忙しい毎日を送っていると聞いている。一人前の教員になるためにはそのための修業が必要であり、熟練するには身につけなければならないことも多い。その時間感覚は、大学院生として名古屋大学で過ごした研究中心の時代とは大いに異なるに違いない。日々瞬く間に時間が過ぎていく。それは疑いのない、そして変えようのない現実である。とはいえ、忙しい毎日をいくら嘆いても、時間は知らないうちに湧き出してはこない。だから、教員としての一定の修業期間を終えたら、その後は教育と並行して、毎日少しでも時間を工夫し、研究を継続しなければならないのである。

しかし、それは「なければならない」なのだろうか。本当に「なければならない」のならば、そういう研究はやめたほうがいい、とわたしは思っている。その一方で、わたしは劉さんがかつて、根気強く、かつ喜びを感じながら、研究に勤しんでいたことを知っている。そしてその地道な「継続」こそが博士論文を書き上げる最大の原動力であったことも。つまり劉さんはかつて、「継続は力なり」という言葉を自身で実践してみせたことがある人なのである。

劉海燕さんは、わたしが名古屋大学大学院国際言語文化研究科に在職中、文化哲学者である夫（前野佳彦）と一緒に運営していた、博士論文をめざ

す院生たちのための研究会、〈文化記号塾〉に参加し、熱心に学んだ塾生たちの一人である。この記号塾の学生たちの多くは、博士論文のテーマとして東アジアの近代化の問題に焦点を当て、それぞれ独自の角度から研究に取り組んでいた。留学生が圧倒的に多かったそのメンバーが集まると、中国語が分からないわたしに構わず、ほとんど中国語でおしゃべりがはずむということもよくあったが、記号塾ゼミの課題レポートや研究誌『文化記号研究』への論文投稿をめぐるのは、議論はもちろんいつも日本語だった。塾生たちはみな、研究者の卵、あるいはよちよち歩きのヒナの段階から互いに切磋琢磨しつつ、博士論文を書き進む過程で大きく成長していった。彼女たちは（そう、博士論文を書き上げた塾生はすべて女性たちだった）最終的に、日本人の塾生に劣らぬ高度な日本語、研究者の日本語の使い手となって、論文を書き上げている。劉さんもそのようにして、わたしたちの塾で大いに学び、大いに成長して、いわば「研究に目覚めた」塾生たちの一人だったのである。

だからまた、劉海燕さんの著書のために書かれたこのささやかな〈序〉にも、多くの著書に付される一般の〈序〉とは異なる特別のメッセージ、かつての指導教員からかつての指導生、かつての塾生に向けた、厳しくまた温かい励ましが込められていることを、劉さんはきっと分かってくれるに違いない。

現・名古屋大学名誉教授

旧・名古屋大学大学院国際言語文化研究科

日本言語文化専攻・比較日本文化学講座 教授

前野みち子

序 章

一、本研究の目的

1895 年、台湾は前年に勃発した日清戦争で敗北を喫した清政府によって割譲され、近代新興帝国日本の最初の植民地となった。1945 年 8 月第二次世界大戦終結まで、台湾は五十年間もの長きにわたって植民地統治下に置かれた。日本の台湾統治は初期から台湾人の激しい武力抵抗を受けた。台湾人の抗日運動は、1915 年の最大規模の武装蜂起「西来庵事件」を境に前期の民衆による武力抵抗運動と後期の土着資産階級及び新興知識人を主力とする非武装の文化抵抗運動とに分けられる。後者は、第一次世界大戦後のウィルソンの民族自決主義、日本大正デモクラシー及び朝鮮「三一運動」、中国大陸「五四運動」などの影響下に興り、社会改造及び政治改革を求め、台湾の近代化を目指す近代的民族運動であった。1920 年 1 月、台湾人の政治団体「新民会」が東京留学生たちにより結成され、同年 7 月に機関紙『台湾青年』が発行された。ここに発表された陳炳の「文学與職務」（創刊号、1920.7.16）が文学改革への意欲を表明したことにより、台湾新文学運動は開始を告げた。このように、台湾新文学運動は 1920 年代の初めを端緒として、台湾近代民族運動と連動しつつ発展していく。

本研究では、1920 年から 1926 年、つまり、後に「台湾新文学の父」と称される頼和が、小説「門閥熱」（『台湾民報』第 86 号、1926.1.1）を以て

台湾文壇に本格的に登場するまでの期間を「台湾新文学運動初期」として位置づけ、この間に現われた文学的活動を研究対象とする。この時期には、これまでの文言文に対して近代的文体としての白話文や日本語で書かれた新文学作品が出現しており、文体改革を目指す白話文普及運動、新文学創造を目指す「新旧文学論争」などが行われた。台湾新文学の成立はまさにこの一連の活動を経て実った成果だったのである。それでは、「台湾新文学運動初期」はなぜ最初から新文学創造を目的とした実践運動とならなかったのか。それまでに台湾知識人たちが参加した文学に関する活動はどのような意味をもっていたのか。また、これらの文学現象は台湾新文学の成立及びその背景をなした社会とどのような関係にあったのか。これらの疑問が本研究の出発点である。

したがって、本研究の目的は、1920年代における植民地青年の文学活動を通して、彼らの台湾近代化を模索する過程を明らかにするとともに、この連動関係に注目しつつ、植民地における台湾新文学の成立過程を考察することである。この研究によって、植民地台湾の近代化の複雑な側面を少しでも解明することができればと考えている。

二、先行研究の検討

これまでのところ、台湾新文学運動に関する研究は、主に史的観点から、また台湾文学史的観点から行われてきた。例えば、陳少廷『台湾新文学運動簡史』（1977）、台湾文学最初の通史的著作である葉石濤『台湾文学史綱』（1987）、彭瑞金『台湾新文学運動四十年』^①（1991）及び大陸の研究者劉登翰による『台湾文学史』（上巻 1991、下巻 1993）、古継堂『簡明台湾文学史』（2002）などがその例である。

① 葉石濤と彭瑞金の著作は邦訳があり、共に中島利郎・澤井律之によって翻訳されている。それぞれ『台湾文学史』（研文出版、2000）『台湾新文学運動四〇年』（東方書店、2005）に収録されている。

先行研究のなかで、1954年に黄得時が発表した「台湾新文学運動概観」^①は、日本統治期台湾新文学運動に関する論述としてよく挙げられている。発表予定だった「抗戦時期中的新文学運動」の一節が結局発表されずに終わったので、実際に扱われている内容は1937年までである。かつて新文学運動に関与した黄のこの著作は、戒厳令下（1949—1987）の台湾で戦前の台湾新文学を知るための重要な資料であった。彼は新文学運動各時期の雑誌に掲載された文学作品をジャンル別に分けてそれぞれ分析し、文学グループと文芸雑誌の関係をも論じている。全体を見渡せば、黄は豊富な資料を集めてはいるが、あまり分析を加えておらず、「台湾新文学運動概観」は題目が示すとおり「概観」にとどまっている。以後に現われた台湾新文学運動の史的著作もまた、ほとんどこの範疇を脱することはなかった。

台湾新文学運動は中国大陆新文学運動の影響を受け、それによって誕生したという見方に対して、彭瑞金は論文「戦前台湾社会運動の発生と新文学運動の始まり」（甲斐ますみ訳）^②においてそれを全面的に否定している。彭は「台湾新文学運動が起こった当初は、文学の目的と意義をそなえてはおらず、文学の目的と役割は社会にあり、台湾新文学運動の誕生の要因もまた文学にあったのではなく、これは社会運動という目的意識をもった社会運動の副産物であった」^③と論じ、「台湾新文学運動の理論・実践と台湾社会運動との緊密な相関性からみれば……台湾新文学運動は中国新文学運動を受けて広がった支流であるなどという言い方は荒唐無稽に近い」^④として、台湾新文学運動の誕生の要因は台湾社会運動にあって、その過程で中国大陆新文学運動からの影響は無かったと主張している。また、「張我軍のかき

① 原載『台北文物』（台北市文献委員会）第3巻第2期、3期、第4巻第2期、1954年8月、12月、1955年8月。後に『文献資料選集——日据下台湾新文学 明集5』1979年3月、明譚出版社。ちなみに、日本統治期台湾新文学運動に関する台湾人による戦後最初の論述は、楊雲萍の「台湾新文学運動的回顧」（『台湾文化』第1巻第1期、台湾文化協進会、1946年9月）である。

② 下村作次郎・中島利郎・藤井省三・黄英哲主編『よみがえる台湾文学——日本統治期の作家と作品』に収録、東方書店、1995年10月。

③ 前掲『よみがえる台湾文学——日本統治期の作家と作品』、23頁。

④ 前掲『よみがえる台湾文学——日本統治期の作家と作品』、43頁。

たてた新旧文学の花火は、熱烈な戦況を引き起こすことはなかった」^①、「張我軍がもちこんだ中国新文学の経験は台湾新文学運動の主流の運動にはならず……」^②などと断言している。台湾新文学の成立過程において、中国大陆からの影響を否定する彭のこのような主張には大きな問題があるが^③、「台湾新文学運動は純粋な文学運動ではなかった」、「少なくとも文学運動の動機をもっていなかった」^④という指摘は説得力がある。彭の論文では、論題の限定もあり、当時の文学現象に関する実証的分析が欠けているが、今後は台湾新文学運動の誕生と社会運動との連動を視野に入れた研究をしていく必要がある。

日本統治期に誕生した台湾新文学運動については、河原功『台湾新文学運動の展開——日本文学との接点』^⑤も新たな視点を示唆している。河原は、1937年以後の日本人の活動が中心になった日本語の文学運動は、これまでの台湾新文学運動と質的にかなり異なるものであることを指摘し、彼の台湾新文学運動の研究対象を1937年で打ち切っている。河原は台湾知識人青年たちが新文学運動の担い手になるまでの経緯を丁寧に考察し、資料を駆使して実証的に論を展開していく。彼は「『台湾青年』『台湾』は文化啓蒙運動中心の雑誌であったから、新文化運動の啓蒙発展のために新文学に関する作品が包摂されていただけのことであって、新文学運動との直接的関係はまだそれほど深いものとは言えなかった」^⑥として、1920年代前半の新文学運動は「新文学運動としては未だ脆弱であった」^⑦と結論付けている。

① 前掲『よみがえる台湾文学——日本統治期の作家と作品』、37頁。

② 前掲『よみがえる台湾文学——日本統治期の作家と作品』、38頁。

③ 「台湾新文学運動初期」に陳圻が主張した文学改革は、その実質が胡適の新文学理念と一致するため、中国大陆新文学の影響なしに台湾新文学運動が誕生したという彭の観方は客観的とはいえない。また、彭の言うように、台湾新文学における白話文改革の主張は確かに張我軍が加わる前に確立されていた。しかし、黄呈聰らの白話文提唱運動は中国白話文運動を参照し、その刺激を受けて展開してきたものである。台湾における中国白話文運動の展開について、本論文の第三章は詳細に分析する。

④ 前掲『よみがえる台湾文学——日本統治期の作家と作品』、43頁。

⑤ 河原功『台湾新文学運動の展開——日本文学との接点』、研文出版、1997年11月。

⑥ 河原功、前掲書、139頁。

⑦ 河原功、前掲書、144頁。

上述した先行研究は、いずれも本研究の対象とした 1920 年代初期の台湾新文学運動に言及しているが、研究の焦点が異なるため、この時代の台湾新文学運動を詳細に分析していない。「白話文運動」や「新旧文学論争」などの文学現象については各自の視点からの見解がしばしば述べられているが、「台湾新文学運動初期」の有機的で、系統的な考察はまだなされていない。

本著では、この時期に現われた複合的な文学現象を「白話文運動」、「初期小説」、「新旧文学論争」という三つのキーワードに絞って、第二章、第三章、第四章において詳細に分析する。この章立ては、「台湾新文学運動初期」において次々と現われた文学現象に沿った結果でもある。第一章で作品「彼女は何処へ？」を分析することにしたのは、台湾社会の現実根ざして書かれたこの作品には、1920 年代初期の台湾知識人青年たちが近代を模索するなかで抱えていた矛盾が最もリアルに現われていると考えるからである。

三、本著の構成

本著は序章と終章を除いて四章からなる。

第一章では、1920 年代始めに現われた「初期小説」中最も優れた作品とされる「彼女は何処へ？」(日本語)を分析する。台湾小説最初の作品と称される「可怕的沈黙」にわずか三か月遅れて発表されたこの小説は、台湾新文学初期において台湾社会の現実を踏まえて書かれた最も本格的な作品であると評価されている。近代的大都市東京にいた作者は、台湾の封建的社会で虐げられた若い女性たちに「東京へ」と呼びかけていたが、まもなく彼自身が帝都東京を後にした。この矛盾はどのように解釈すべきだろうか。また作者謝春木が台湾の近代化を目指す途上で何が起こっていたのか。これらの問題を検討する一方で、彼の代表する植民地知識人青年たちが女性解放運動を媒介として台湾社会改造運動を目指し、帝都東京をモデルとする植民地台湾の近代化を実現しようとしたとき、封建的家父長制下に育った彼らの内面に生じた葛藤とその克服の困難についても論じたい。

第二章では、台湾における中国(大陸)白話文運動の展開を考察する。

植民地台湾における白話文運動については、大別すると、台湾新文学の一環として扱う立場、西洋国民教育の視点から台湾民衆への文化普及の道具と見る立場の二種類の研究がある。前者の例としては早期に発表された王育徳の「文学革命の台湾に及ぼせる影響」(1959)が挙げられるが、後者としては近年植民地の言語問題に強い関心を示している陳培豊の著書『「同化」の同床異夢——日本統治下台湾の国語教育史再考』(2001)がある。台湾における中国白話文は、その普及に際して、大陸新文学と切り離して単なる近代の文体として導入された。この現象については先行研究がすでに指摘しているが、その原因についての詳細な分析は行われていない。また、白話文普及運動に至るまでの台湾知識人の近代文体への建言も系統的な考察が見当たらず、台湾における中国白話文運動の全貌を把握することができない。本章では、当時の台湾社会運動の状況を背景において、雑誌『台湾青年』の変遷を考察し、そこに展開されていた中国白話文運動の実態を示したい。また、台湾の知識人青年たちは、中国白話文を台湾に導入しようとしたとき、近代的文体を特徴づける「言文一致」性が、日常用語を台湾語(主に閩南語)とする台湾では実現できないという困難にぶつかった。それにもかかわらず、台湾文化促進を目指して、中国語雑誌『台湾民報』が発刊され、台湾で中国白話文の普及運動が推進されている。彼らが植民地の近代教育によって身に付けた近代語としての日本語を提唱せず、中国白話文を導入しようとした意図及びその論拠がどこにあったのか、白話文の普及を積極的に提唱した植民地青年たちは、中国白話文を通して、台湾にどのような近代化をもたらそうとしたのか。これらの問題点を、雑誌『台湾青年』/『台湾』における中国白話文に関する言論を分析することにより、明らかにしたい。

第三章では、「初期小説」を考察する。初期に発表された小説は計二十二篇あり、内容によって、「結婚・家・封建制度の問題に関する小説」、「植民地台湾の政治的問題に関する小説」と「その他」の三つのグループに分けられる。先行研究では「初期小説」として、文学史的著書に「彼女は何処へ?」、